

天神社

○天押日命也國造阿波國造天穗日命日當孫大伴直大瀧定賜○按景行天皇狩此國六鴈命賜氏膳大伴部以大伴押日命裔爲國造仍其故爲大伴部乎續後紀承和三年十一月辛丑安房國言安房郡八伴直家主云々萬葉朝夷郡上下九子連大歲云々按九子與伴同祖○信友云姓氏錄大伴宿禰條可考

莫越山神社

〔姓氏〕大彥命男彥背立大稻與命○按莫越稻與歟

下立松原神社

〔姓氏〕松原臣阿倍朝臣同祖大彥命後也

高家神社

○魂命亦名高木神按太玉命當郡天神社天忍日命共高魂命子也

式外舊社

火神

〔續後紀〕承和十四年七月壬申加安房國火神并從祭神正稅穀一百斛○信友云火一本作大尾張殿本作火印本火トカケルハ筆者ノ書風也他ニモアリ

從祭神

○續後紀ノ文上ニ見ユ從祭神一本ニ從神祭ニ作ル

伴信友全集第一

例言

一本編は、伴信友全集の首巻として神名帳考證十四卷、神名式考證土代附考の二種を收む。  
一 神名帳考證は、伴翁が延喜式神名帳に諸書を参照し、式に擧げられざる國史見在の諸社をも掲げ、其祭神を始め社創立の由來、及び名稱并に沿革等を考證せしものに、黒川春村氏の補注せしものにて、享保年中度會延經の著はせる同名の書世に傳はれ、ども、其内容は全く異なるものなり。  
一 本書中補注又は頭注と記せるものは、もとその鼈頭に書せるものなるを今便宜の爲め、其處に挿入せるなり。  
一 本書は、翁の自筆本を春村氏謄寫校訂せる、黒川眞道氏の祕藏本

名帳考證 十九

延喜式卷第九之十九 東海道第十三

總國五座

大一座

小四座

埴生郡一座大

前神社名神大

〔三實〕貞觀十年七月廿七日上總國從五位上勳五等玉琦神從四位下元慶元年四月十七日授從四位上勳五等玉琦神正四位下同八年七月十五日上總國正四位下勳五等玉琦神正四位上〔姓氏〕忌玉作高魂命孫天明玉命之後也〔古語〕太玉命所率神名櫛明玉命〔著聞〕延久二年八月二日上總國一ノ宮ノ御託宣ニ懷妊ノ後既ニ三年ニ及ブ今明玉國ヲ治ムル時ニノヅミテ若宮ヲ誕生スト仰ラレケリコレニヨリテ海濱ヲ見ケレバ明珠一顆アリケリ御正體ニ違フ

橋神社

長柄郡一座小

〔三實〕元慶元年四月十七日上總國從五位上勳五等橋樹神正五位下同八年七月十五日上總國福神正五位下按福當作橋知雄〔景行紀〕日本武尊進相模欲往海上總海中暴風忽起王船漂蕩時有從王之妾橋姬云々言訖乃披波瀾入之云々號其海曰馳水

嶋穴神社

海上郡一座小

〔三實〕元慶元年四月十七日上總國從五位上勳五等島名神正五位下  
國國人云今屬市原郡○良道市原郡引田村長云五井驛姊崎驛ノ間嶋野村ニアリ社ノ後ニ古キ穴

アリ  
○信友云「延喜式」廿八嶋穴驛アリ「和鈔」鳴穴郷ト  
アル嶋ノ誤也「延喜式」山名郷ト云モアリ「賦  
役令」鳴藤トアルハ嶋ヲキキノ誤也コレ嶋ト鳴ト誤  
レル例也

姉崎神社

〔三實〕元慶元年四月十七日授上總國從五位上勳  
五等姊崎神正五位下同八年七月十五日授正五位  
下勳五等姊崎神正五位上○今在姊崎村  
國圖八云今屬市原郡

望陀郡一座

飯富神社

印本作「飯富」非也「和鈔」飯富於飯亦依之誤也  
實「元慶元年四月十七日上總國從五位上勳五等飯  
富神正五位下同八年七月十五日授正五位下飯富  
神正五位上○今在飯富村「古語」天富命更求沃  
壤一分阿波齋部率往東土播殖麻穀好麻所生  
故謂之總國古麻所生之也今上○按此郡轄市所謂  
故謂之總國古麻所生之也今上○按此郡轄市所謂

望陀布是也飯富神社者麻殖神而天富命之社乎○信  
友按下總葛飾郡之意富比神社アリ飯富神社ノ神主  
ハ望田國造深川意美命ノ後也「國造」須惠國造深河  
意美命ハ建許呂命子也同書馬來田造云々天津葦根  
命後建許呂命子

式外舊社

前廣神代神

〔三實〕貞觀十年九月十七日上總國正六位上廣神  
代神高瀧神並從五位下元慶元年閏二月廿六日上總  
國正六位上神代神常世神從五位下○信友云神代神  
ハ此前廣神代神ト同神トキコユルニ位階從五位下  
トアリテ貞觀十年ノ位ト同シキハイカマナホ可  
考

高瀧神

國圖八云今屬市原郡  
郡土井驛南方一里養老川ノ東西廣村ニアリ神代  
神代村アリ混ズベカラズ

〔三實〕貞觀十年之文引子于上○天保十四年三月市  
原郡賀茂村賀茂大神宮御朱印地小幡山城云當社則  
高瀧神社也  
國圖八云今屬市原郡  
五井驛ヨリ養老川ノ川上五里餘上賀茂村ニアリ  
神主平田市正ト云下賀茂村ハ五井ノ隣村ナリ又  
瀧ハ五井ノ川上栗又村ニアリ此邊スベテ高瀧庄  
ナリ

常世神

氏神

〔三實〕元慶元年之文引子于上  
〔三實〕元慶元年四月十七日上總國從五位下氏神從  
五位上  
建市神  
〔三實〕元慶八年七月十五日正六位上建市神田原神  
從五位下

武十村ニアリ

田原神

〔三實〕元慶八年之文引子于上  
國圖八云今屬市原郡久留里邊俣田村ニアリ  
八幡宮  
○國人云當國八幡ノ舊社兩社アリ一ハ望陀郡木更  
津ノ近處ナリ是レ殊ニ古社ナリト云社ハ海ニ臨メ  
リ社門石柱對文スナク毎年競馬トテ村民馬ニ騎テ  
社前ノ路上ヲ奔走ス人ニ行アリ大ニ此社ヲ敬ミテ  
云ハバコノ神ト云ハバ市原郡八幡ニアリ往古隣村  
ハ五所村ノ人ト云ハバ至リテアル神祠ニテ神像ヲ尊ヒ立  
退キケルガ追手ノ者ニ答ラレテセンカタナキマ、  
ニ五所ノ浦ニ君玉ヘト祈念シテ像ヲ海中ニ投入ケ  
リサテ其人國ニ歸ラヌサキニ五所ノ海中ニ毎夜光  
リ物アリ歸國ノ後其ヨシヲ聞テ網ヲオロスニハタ  
シテ像ヲ得タリ即其地ニ祭ル八幡ト稱ス其後白風ニ  
フ今ノ地ニ移ス今ニ至ルマデ五所ノ人イタラザレ  
ハ神興ヲ出ス事アタハズ此地國分寺ニ近キユニ

シバノ官使往來ノ便ニ隨ヒテ大社トナルト云リ  
今御朱印地ナリ○春村按武藏國橋本郡鶴見村杉  
山神社神事正月十 唱歌ニ上總ノ八幡はおもしろや  
はんばにちゆつてこまくらて云々ト唱フ此ハ望  
陀ノ方歟又市原郡ノ祝歌ニ「江戸ガミタクハ八幡  
ミコヤハタ八幡コケラブキ」ト詠フハ市原ノ方ナ  
リ○市原郡市東庄八幡郷御宮路起當社八幡大神  
ハ人皇十六代應神天皇を稱し奉る中宮宮は一國一  
社ノ八幡宮中興治承四年源賴朝公當社へ御願文速  
に御開運當社嚴重之御建立あり其後源義滿公今ノ  
神興四社御寄進當御聖代に至りて 神君様深ク御  
信仰あらせられ百五十石ノ御朱印難有も 御代々  
様今に於て御寄附ノ御宮美麗を盡し誠ニ神威ノ尊  
き事あげてかぞへがたく年々八十餘度之御祭事天  
下泰平御武運長久ノ祈願所なり「天保六乙未年三  
月神主市川伊賀別宮若宮寺」房玄法印記「觀應二年  
五月廿二日尾仙僧正申云去年十月地蔵院僧正等同  
時當職被ニ恩補 畢而地蔵院僧正既以 上總市原八  
幡別當職事 今度被ニ成ニ安堵之上者久遠壽量院同  
可被ニ成ニ安堵之由雖申之彼市原別當職者非ニ

相論職ニ仍被ニ成ニ安堵

其治總六箇年也稱ニ家彌不吉加之長者之始近例多  
改ニ補之尤可被ニ改仰ニ歟當流之習以ニ嫡子ニ補ニ大  
彌宜以ニ男ニ被ニ補ニ神主 仍ニ男無ニ其仁「群載」  
七奉幣使差文 勘學院學堂差ニ進鹿島香取兩社奉  
幣使ニ事 學生正六位上藤原朝臣信賴 右依ニ宣  
旨ニ廣任辭退所ニ差進 如ノ件 長治二年三月廿四  
日 學頭正六位上藤原朝臣宗行 「和鈔」香取  
千葉郡二座

神名帳考證 二十

延喜式卷第九之廿 東海道第十四

下總國十一座

大一座

小十座

香取神宮

〔神代紀〕今在東國採取之地也「續紀」寶龜八年七  
月乙丑叙香取神正四位上「續後紀」承和三年五月  
奉授下總國香取郡從三位伊波比主命正二位同  
年十月丙辰下總國言香取神禰宜准常陸國鹿嶋郡  
宜遷代相續同令把「笏許」之「玉葉」寬喜元年五月  
一日二條中納言來申香取神主問「事當時神主本流  
中臣也助道者大中臣也鹿嶋神主餘流也而康治之比  
中臣氏無ニ其仁之時據申子細拜任後三代雖似  
相續中臣氏互相交補之也就中助道三度補之

寒川神社

〔儀式帳〕寒川比女命○信友云千葉郡寒川村ノ屬邑  
寒川新田ト云フ處ニ古社アリテ今ハ神明ト稱スレ  
ドモ式內寒川神社也村人ノ中ニテ鑿取ト云フヲ撰  
定テ神事ニ預ル神體ハ所謂御幣ニテ祭日ニ新ニ關  
ヘテ田物ハ海ノ沖ヘ持出テ流ス也此神靈驗著キコ  
ト常ニテ無禮ヲナスコトアレバ其祟ヲ受テ病ミ出  
テ死ニ至ルモノ多シ其祟ヲ受タルモノ、眷屬ノ目  
ニハ龍トモ云ベキ狀ノモノ、其家ヲ遠ル如クホノボ  
ノミユルコトアリ其祟ヲ受タル事ヲ早ク悟リテ患  
ヲ新斷スレバ病治ルコトアレド其ヲ悟ル事遅ク病



全5巻 49440 (48000)

伴信友全集 第一卷
昭和五十一年八月二十日 初版第一刷発行
昭和六十二年七月二十日 初版第二刷発行
編者 國書刊行會(代表・市島謙吉)
発行者 教仁郷建
発行所 株式会社ペリかん社 〒113東京都文京区本郷二丁目二十四番四号 ☎〇三三八
一四八五二五 振替 東京〇一四八八八一
印刷 平河工業社 製本 小高製本
セット定価 四八、〇〇〇円

(明治四十年刊國書刊行會版の覆刻)

1321-771961-7612